

大陸（中支）

中国戦線の思い出

富山県 石倉 清

私は大正十（一九二一）年三月二十一日、旧富山県新川郡早月加積村追分の福沢家の五男として生を享け、男兄弟ばかりの五番目でした。家は農家でしたので幼い頃から農業の手伝いをしました。

昭和十五（一九四〇）、六年頃でしたか、一番上の兄は召集令状が来て満州へ出征しました。長男の兄が出征して間もなく次兄も召集となり、当時は村を挙げての大歓送にて、駅まで日の丸の小旗を振って出征兵士を見送ったのでした。昭和十六年の末に三男の兄も出征することになります。軍

も今までのような派手な歓送はまかりならぬと言うことでした。

勿論、私も召集令状にて昭和十七年四月十日、東部第四十八部隊に入隊することとなりまして、福沢家は長男、二男、三男（注 四男は体が弱くて兵役免除）そして五男の自分と兄弟四人の出征兵士の家として称賛されたものでした。

近所の方々は私の入隊を知って、大勢の方が激励に来てくれました。四月十日の早朝六時、富士神社に参拝をして、家族と共に富山電鉄中村駅に向かいました。私は村の産業組合に勤めておりましたので、駅には村役場の職員、組合職員、岩城駐在巡查までが来てくださったのには驚きました。

兄達の出征時のように日の丸の小旗を振って、

万歳万歳の大声はありません。日の丸の小旗を静かに振るのみでした。列車は見送りの人々に別れの汽笛を鳴らして静かに駅を離れて行く。

入隊は平服とのことで、私は国民服乙号に風呂敷包のみで営門を通り、営庭には今後戦友となる大勢の人達がおおり、身が引き締まる思いでした。

直ちに各中隊、分隊へと配属され、私は第三中隊第三分隊員となり、宿舎に入りました。当分の間、命令の出るまで歩兵第六十九連隊の留守部隊である東部第四十八部隊員として、戦地で即応できる基本教練を受けることとなりました。

入隊後約二十日間位、九二式歩兵砲の教育を受ける。その後の六月二十日頃の第一期検閲まで九七式曲射砲の教練も受けました。また約一週間程度、馬事教育も受けました。

当時の教官 秋山少尉

助教 大西伍長

助手 多川上等兵

栗瀬上等兵

第一期の検閲も終わって、六月二十五日から六月二十七日まで二泊三日の外泊が許可されることとなりました。いよいよ戦地行きが決まったのです。入隊後約二カ月半ぶりに再び我が家に帰りました。入隊前の職場、村役場、産業組合等へ野戦行きの挨拶に行きました。

両親は高齢で、父は「どちらが先に死ぬかわからないが、元気で奉公してこい」との別れの言葉であった。二十七日午後五時まで帰隊するようにとの許可でしたので、家族と別れの挨拶をし帰隊しました。

六月三十日午前六時、原隊を出発、外地転属の命令が下りました。行き先は北支派遣軍独立混成第一旅団(島兵团)、旅団長は陸軍少将小松崎力雄、独立歩兵第七十二大隊(島二九七二部隊)大隊長は陸軍大佐丸山房安である旨知らされました。

隠密裏の行動と言うことで駅には見送りの人達もあまり見られませんでした。我々を乗せた列車は宇品港に向かい七月一日宇品港に着き、愛国婦人会の方々がお茶の接待をしてくれました。夕刻、愛国婦人会の方々の歓迎の中を宇品港を出港しました。

七月二日、釜山港に到着、直ちにその日の夕刻に有蓋貨車に乗り込み出発しました。貨車は馬匹を運んだ後で、所々馬糞がこびり付いて異臭が鼻をつきます。列車は一路北上し、七日、満支国境の山海関を早朝に通過し、輸送指揮官より「これよりいよいよ戦地である」と伝達されました。右手の方に万里の長城が見える。身の引き締まる思いになりました。

明けて八日、列車は石門(現石家莊市)に到着。一部の者は大原方面に別れ、自分達は一路南下して邯鄲駅に停車しました。ここでも一部の者が下車、見習士官全員も下車、我ら兵のみは馬頭鎮にて下車、西佐線に乗り換え、北支の峰々の間を通

つて、部隊本部の独立歩兵第七十二大隊(島二九六二部隊)に到着しました。

転属者七十八人を代表して、丸山部隊長に到着を申告をする。第一中隊二十人、第二中隊二十人、第三中隊二十人、第四中隊十八人の編成となりました。

小生は第三中隊配属となり、その日の夕刻、磁県に駐屯していました。中隊本部に行き、第三中隊長、陸軍中尉・木津次作隊長に申告を行い訓示を受け、いよいよ軍人としての覚悟を新たにしました。現地教育としては軽機教育十人、擲弾筒教育十人の二班に分けられました。

教官 西森少尉

軽機 助教 早川兵長 助手河合上等兵

擲弾筒 助教 村田兵長 助手石坂上等兵

毎日、訓練そして内務班の教育に明け暮れました。七月中旬、中隊本部は河北省西部の義井と言う所に移動することとなりました。

初年兵教育も緊迫した戦局の影響で教育期間も短縮され、従来の六カ月が二分の一の三カ月で行われました。内務班も古兵の人々と一緒に起居を共にしましたが、戦地の場合は初年兵に対する体罰も少なかったようでした。この時期になって、軍から体罰禁止の命があり、上官の方針も、隊員全員が運命を共にするということで体罰が少なくて済むようになりました。

八月中旬、第二期検閲が終了し、中隊は付近の討伐等に出動しました。

九月上旬、自分は各中隊より二人選抜された暗号専修員教育のため部隊本部で九月末日まで基礎教育を受け、更に十月より河南省観台鎮と言う所で各中隊より二人の計四十五人での島兵团応用教育を受けました。教育中は小作戦に出動し実戦における訓練も実施されました。

ある日、八路軍に包囲、襲撃されて戦死者も出ました。初めて敵との交戦で尊い命を落とした戦友は第一中隊の兵隊だと言う。私もいつかは彼の

ようになるのかと戦争の痛ましさを感じたものでした。

十一月末、教育も終了し検定を受け、そして各原隊へと復帰し、自分は部隊本部勤務となりました。

昭和十八年一月中旬、上陳警備隊の通信要員交替のため分遣されることとなりました。約一個小隊の警備ですので敵の襲撃に備えトーチカを築造中でした。ここでは交信量が少なくなのどかな勤務でした。分遣隊勤務は初めてでありまた最後でもありました。

郷里からは便りや慰問袋等も届いてきました。そして便りには十二月に兄宗二（三十四歳）が死亡したとの知らせでした。

昭和十八年三月、北支方面軍は冀西作戦参加のため兵团司令部に集合、我が部隊は石大線の井徑駅前より徒歩出発、二昼夜の強行軍で菅理県城に到着しました。それよりは山岳戦となり、山西省

五台山麓、南方の共産軍基地を撃破して第一次作戦を終了しました。そして次期作戦のため山麓のとある大きな部落に宿営をしました。作戦中は野営が大半で休養もなく、ここで四、五日の久方ぶりの大休止となつて兵器、被服等の補修をするようにとの命令によつて、翌日から被服の洗濯、補修に我々初年兵には忙しい大休止となつたわけでした。

翌日、私は通信隊の古兵五、六人分の衣服を抱え、郊外の綺麗な川、内地の河川と錯覚するようなこの川辺に行きますと、多くの中国人の女性達に混じつて日本兵たちが洗濯をしていました。川辺には楊柳の葉がゆれており、その下で短い棒片で洗濯物をパタパタと叩いている。こののどかな風景を見るとどこで戦争なんかやっているんだろうとさえ感じました。

私は下流の空いた場所で洗濯をしていると、後から「弥好！」と挨拶があり、ビックリして振り向くと中国の母娘が立っていて「あなたが一人で

は大変だから手伝ってあげる。みんな帰つたではないか」と言うのです。見渡すと戦友達の姿は既になく、母娘は敵国の中国人であることや女性であることから気恥ずかしく一度は断つたのですが手伝つていただきました。

終つて御礼を言い帰ろうとしたところ、可愛い男の子が来たのでポケットの金平糖をあげてその日は別れました。翌日も晴天で、昨日の残つた洗濯物を抱えて川辺に行くと、また日中合同洗濯会の最中でした。昨日の場所へ行くと昨日の母娘と男の子が来ていました。隣で洗濯を始めると、昨日と同じく手伝つてくれて早く終わりました。

母に「二人は姉弟ですか」と聞くと「親子です」と言う。男の子は理知的な感じなので「父親はどんな職業の方ですか」と聞くとちよつと言いよどんでいきましたが「この子の父親は日本人です」と言う。こんな奥地に日本人が来ている筈がないと思ひ、娘と子供が帰つた後で再度母親に聞くと「実は日本兵の子供であり五歳だ」と言うのです。私

は逃亡兵か捕虜兵の間の子供だと思つて住家の場所を聞いて別れました。次の日は無線送受が多く、作戦指示や行動計画の暗号化業務で多忙な日でありました。

その日の午後、弾薬、糧秣補給と一緒に慰問袋が届き各自に配られました。私は二度目でしたが、作戦地で慰問袋を頂くなど夢のようなので袋を開きながらふと川辺の子供のことを思い浮かべました。そして文房具や菓子、缶詰等を子供に上げようと思ひ、明日川辺に洗濯に行くのが待ち遠しくなりました。

翌朝、早々に今夕作戦行動に出発するとの電報が入り、忙しく万端の準備を整え終えて急いで川辺に行きました。中国人の中には母娘の姿が見当たりません。どうしてもお札の気持ちに渡したいと思ひ、先日聞いた場所を探しますとすぐに分かりました。中国特有の四合院造りの中流家屋でした。内を伺いながら「弥好」と呼ぶと母娘が出て

来て大変喜んで迎えてくれました。そして慰問袋を渡すと、子供を呼び、中の鉛筆や折紙、お菓子など不審のようでしたが、身ぶりや筆談で説明すると大変喜んでくれました。

他にも宿舎に戦友の不要物がありますのでその中から使用できそうな物を選び届けると家族で歓迎され、お茶を頂きました。久方ぶりに家族のぬくもりに触れた思いでした。「内緒で来たのでもう帰る」と言うと言頭を持ってゆけと言われ有難く頂き宿舎に帰りましたが、古参兵に「貴様は初年兵のくせに生意気だ」と詰問されビンタをくらいました。悲喜複雑な気持ちで作戦に出発したのですがこれで束の間の休息の日が終わりました。

我が国では戦災孤児、残留孤児、戦地の落として子など戦争の傷跡はまだまだ癒えておりません。こんな悲しい事が、二度とあつてはならないと思ひます。

先の中国の子供が健在であれば六十歳半ばの筈、戦地での忘れ得ぬ想ひ出であります。

私の人生奇遇

昭和十八年五月中旬、私は部隊本部勤務を解かれ第三中隊本部通信班勤務となりました。兵舎は赤煉瓦造りで、中隊長は陸軍中尉・鈴木毅でした。

六月中旬に北支方面軍「一八夏大行作戦」が開始され、我々中隊もこれに参加となり二千メートル位の高地での山岳戦でした。国民軍第二十七軍を黄河北岸まで追撃、軍長の劉進は黄河を渡り南岸の洛陽に逃れました。このために次期「一八秋大行作戦」準備のため新郷兵站で、兵器、被服等の整備補修等を行い、休養となったのですが、私は高熱を発し、意識不明のまま新郷の野戦病院に運ばれました。

後日、小康を得た折に看護婦さんから、軍医さんは再三にわたり危篤を宣告されたことを知り、前線の設備が悪く氷もなく、井戸水での看護その労苦が忍ばれました。病状は好転せず、長期療養のために内地送還が決まり、十月中頃天津陸軍病

院に転送され、新郷病院の皆さんとは最後のお別れとなりました。

天津陸軍病院では内地送還が嫌なので、軍医さんに再三、現地療養をお願いしたところ、中国の北載河陸軍病院で療養に専念することになり、昭和十九年四月、治療退院する事ができました。そして前線の原隊に復帰し、その後、河南作戦、京漢打通作戦も終わり、黄河南河の鄭州と揚子江北岸の漢口の間地である確山というところで終戦となり、昭和二十一年五月に無事復員しました。以後今日まで五十六有余年、健康な現在を感謝しています。

私は晩年、入院療養した折に、医師、看護婦の皆さんにお世話になり、再度元気で農業のお手伝いができる現在の幸せは、五十数年前の中国の野戦病院でお世話になった皆さんのお陰なるものと思います。

当時、中国で、軍人軍属は警備地区では胸に名

札を付けていましたので、会話などから記憶を辿りました。そして定かではないのですが日赤京都班ではと思いました。

その後連絡によりすべてが判明し、大半の方はご健在で、その後の経緯と近況も分かり、お礼の挨拶を述べることができました。また軍医さんは藤吉忍軍医大尉と石橋軍医見習士官でありました。

藤吉軍医は昭和十九年に現地病院で逝去されたことを知らされました。軍医さんは穏やかな人で、天津病院に転送の折、私は「軍医殿、内地送還は嫌です。この病院で治して下さい」と頼むと「福沢君、野戦は設備が悪いから内地で療養した方が早く御奉公できるよ」と諭された温顔が今だに頭に浮かびます。御冥福を祈るのみです。石橋軍医さんは前線に転属され、その後の消息は判明しませんでした。人生とは助ける人が早く亡くなり、亡くなるべき人が今だに健在であり、多くの人の支えによる奇遇を感謝する次第です。

忘れ得ぬ中国少年

私が昭和二十年八月、中国河南省確山県竹溝郷で終戦となり、「国民政府軍二百二十二連隊の武装解除を受けて偃城県召陵寨出水劉に抑留され、翌年の正月過ぎに帰国できることになりました。そこで中国側の労役や自衛警備勤務の生活が始まりました。

正月を過ぎた或る日、帰国態勢が進まず、半年位遅れる予定との通達がありました。給食が三分の一に減食となつて、中国側の労役に従事する事は大変厳しいこととなりました。私の班（戦闘体制の場合の分隊）は総員十二人で、二十代前半五人、三十代後半七人の編成で、抑留生活上の軽作業のほかはすることがないため班員はかなりの空腹を感じていたようで、私の班へ来る物売りの少年に物々交換で食物を得て空腹を満たしていました。

いつしか皆の私物品も底をついたようで、そのうち何か不祥事でも起きたらと考え、或る日少年

を物陰に呼んで「物売りに来ないよう」に頼んだところ「それは駄目です」と断られました。

そこで私は「日本兵がお前の食物を強奪したら中央軍に訴えるだろう」と言う、「そうだ」と言う。それでは困るので私は少年に「君の村か近隣の村で、四、五人の軽作業をさせてくれる農家を探して欲しい」と頼みました。しかし良い返事がないので、次に増田初年兵を通訳を兼ねて同伴し私の真意を伝えました。彼は「近い内に相談にくる」と了承してくれましたので、私は「作業の報酬は食料品でお願いしたい」と頼み、その他の事は少年を信頼することにしました。宿舎に帰り班員に一部始終を話すと皆は喜んで賛成してくれました。

中国側の労役及び自衛警備に服さない者は交替で作業に出ることになりました。皆は少々退屈していたようなので帰国まで元気で参加してくれました。二、三日後、少年は家の修繕、土塀の修理、畑の軽作業を申し入れてきたので作業の編成をし

て、翌日から元気で作業に出掛けました。

そのうち少年とも親しくなり、彼の姓名は李等生、年齢は十三歳、祖母、妹の三人暮らしで両親はなく、親達は日中戦争との関係があるようで、多く語ろうとしません。初めて会った時には私達に反感があつたようでしたが、いつしか私達には笑顔で話しかけ、兄弟のような親近感を持つようになくなりました。それから帰国までいろいろの作業を少年のお陰で続けることができました。

三月末、突然帰国命令ができました。四月三日までに京漢線偃城駅前に集結せよとの命でしたので、宿舎を整理して引揚げの準備を始めました。私は抑留後に大変御世話になった李等生宅を訪問し、帰国することを告げ、皆の代わりに大変御世話になったお礼と別れの挨拶をしますと、円らかな瞳に涙を浮かべた少年の淋しそうな顔が今でも忘れることができませぬ。

その晩、李少年は宿舎を訪れ、持参の御土産で小宴を開き、皆と別れを惜しみ話は尽きませぬで

した。私達は徐州、南京經由で上海に集結となり、宿营地の出水劉を出発、偃城駅前に到着したのですが、列車の配車が遅れ、ここで当分待機することとなり天幕での露営となりました。

数日後天幕の間を「福沢はいないか」と尋ねる声が聞こえ、出て見ますと李少年が籠を抱えて立っていました。「どうしたの」と聞くと、福沢達は汽車が来ないのでまだ帰れないとの話を村で聞き、今朝偃城にくる馬車の便があり、祖母が「福沢達は困っているから食物を持って見てきなさい」と暗い内に村を出て届けに来たとのことでした。李家族の心温まる食べ物を皆で嬉しく涙して頂く幸せな一時でした。

皆は今度こそ最後の別れになるだろうと、残り少ない私物を集め彼に贈り、私は四年間暗号手として愛用して来た記念の万年筆を贈り、各自握手をしながら別れました。

翌々日出発することができ、四月二十六日に山口県仙崎港へ全員無事上陸、復員することができ

ました。

こうして抑留の間、李少年の協力により私達は空腹を満たす事ができ、中国の人達と心のふれ合う時間を得たことは幸せであったと思います。健在であれば六十八歳の老人の筈、尋ねることもできず今となつては忘れ得ぬ李少年の健福をお祈りする次第です。

四月二十六日に山口県仙崎港に上陸、復員手続きを完了しました。私達同年兵三人は、遺骨二体を富山復員部へ護送を依頼され、二十七日朝、富山駅着、不二越工場内の復員部に送り届け無事任務終了しました。

戦友の栗島は富山市内、稲垣と私は滑川駅まで、再会を期して別れ、懐かしの我が家には午後二時頃帰宅することができました。父は昭和二十年七月にすでに亡き人となりました。

私が出征するときに父は「どちらが先に死ぬかわからないが元気でご奉公してこい」と言つて別れたのですが、いつ死ぬかわからぬ戦地の私の

病気で生死の境をさまようても元気に帰省することができたのに、と仏前に手を合わせ御冥福をお祈りしました。

戦争は罪なき人を殺し子供から老人まで無差別に攻撃され、最近では自爆テロが頻繁に起き攻撃すれば報復する。憎しみは憎しみを生む戦争を、この世から無くすることが、我々の望みたいところでもあります。

中支戦線の苦闘記

宮城県 斉藤 敬治

二男五女の兄弟の長男として、農業を営む普通の生活環境の中で農業に従事しておりました。昭和十六（一九四一）年の徴兵検査において甲種合格は当たり前のことで肩身の狭い思いをせずに済みました。

昭和十七年四月十日で同じ検査をした者では最終の入営となりました。本来は昭和十六年十二月一日の入営でしたが、何の理由か判明しなかったのですが同郷の友人と差し替えとなったようでした。

出征の日がやって来ました。自宅の広い前庭には親類縁者や近隣の人々が相集う中で、盛大なる壮行会を催して頂きました。興奮して胸の高なる中で、これまで人前で話したこともなかったので緊張した面持ちで「皇国のために身命を賭して御